

日本文学全集

14

谷崎潤一郎

細雪(全)

河出書房

谷崎潤一郎



カラー版日本文学全集 14

1970©

昭和四十五年七月二十日 初版印刷
昭和四十五年七月三十日 初版発行

定価 七五〇円

著者 谷崎潤一郎

発行者 中島隆之

印刷者 草刈龍平

装幀者 亀倉雄策

本文印刷 中央精版印刷株式会社

口絵印刷 凸版印刷株式会社

製本 加藤製本株式会社

製函 加藤製函印刷株式会社

本文用紙 本州製紙株式会社

クロース 日本クロス工業株式会社

発行所 株式会社 河出書房新社

東京都千代田区神田小川町三丁目六番地

電話・東京(292)三七一一(大代表) 振替・東京一〇八〇二

落丁本・乱丁本はお取替えいたします

0393-331114-0961

目次

谷崎潤一郎

細雪

.....

五

注釈

保昌正夫 三三

年譜

小島信夫 六五

解説

安田靫彦 三五

巻頭口絵

色刷挿画

小倉遊龜

谷
崎
潤
一
郎

細

雪*

上 卷

「こいさん、頼むわ。——」

鏡の中で、廊下からうしろへはいって来た妙子を見ると、自分で襟を塗りかけていた刷毛を渡して、そちらは見ずに、眼の前に映っている長襦袢姿の、抜き衣紋の顔を他人の顔のように見据えながら、「雪子ちゃん下で何してる」と、幸子はきいた。

「悦ちゃんのピアノ見たげてるらしい」

「悦——なるほど、階下で練習曲の音がしているのは、雪子が先に身支度をしてしまったところで悦子に擱まって、稽古を見てやっているのであらう。悦子は母が外出する時でも雪子さえ家にいてくれればおとなしく留守番をする児であるのに、今日は母と雪子と妙子と、三人が揃って出かけるというので少し機嫌が悪いのであるが、二時に始まる演奏会が済みさえしたら雪子だけ一と足先に、夕飯までには帰って来て上げるといふことでどうやら納得はしているのであった。

「なあ、こいさん、雪子ちゃんの話、また一つあるねんで」

「そう、——」

姉の襟額から両肩へかけて、妙子は鮮かな刷毛目をつけてお白粉を引いていた。決して猫背ではないのであるが、肉づきがよいので堆く盛り上がりっている幸子の肩から背の、濡れた肌の表面へ秋晴れの明

りがさしている色つやは、三十を過ぎた人のようでもなく張りきって見える。

「井谷さんが持って来やはった話やねんけどな、——」

「そう、——」

「サラリーマンやねん、MB化学工業会社の社員やて。——」

「なんぼぐらいもろてるのん」

「月給が百七十八圓、ボーナス入れて二百五十圓ぐらいになるねん」

「MB化学工業いうたら、佛蘭西系の会社やねんなあ」

「そうやわ。——よう知ってるなあ、こいさん」

「知ってるわ、そんなこと」

一番年下の妙子は、二人の姉のどちらよりもそういうことには明るかった。そして案外世間を知らない姉たちを、そういう点ではいくらか甘く見てもいて、まるで自分が年輩のような口のきゝ方をするのである。

「そんな会社の名、私は聞いたことあれへなんだ。——本店は巴里にあつて、大資本の会社やねんてなあ」

「日本にかて、神戸の海岸通りに大きなビルディングあるやないか」

「そうやて。そこに勤めてはるねんて」

「その人、佛蘭西語できはるのん」

「ふん、大阪外語の佛語科出て、巴里にもちょっとぐらい行てはったことあるねん。会社のはかに夜学校の佛蘭西語の教師してはつて、その月給が百圓ぐらいあつて、両方で三百五十圓はあるのやて」

「財産は」

「財産いうては別ないねん。田舎に母親が一人あつて、その人が住んでる昔の家屋敷と、自分が住んでる六甲の家と土地とがあるだけ。——六甲のんは年賦で買った小さな文化住宅やそうな。まあ知れたもんやわ」

「そんでも家賃助かるよつてに、四百圓以上の暮しできるわな」

「どうやらか、雪子ちゃんに。係累はお母さん一人だけ。それから田

舎に住んではって、神戸へは出て来やはれへんねん。当人は四十一歳で初婚や云やはるし、——」

「何で四十一まで結婚しやはれへんだやろ」

「器量好みでおくれた、云うてはるねん」

「それ、あやしいなあ、よう調べてみんことには」

「先方はえらい乗り気やねん」

「雪あんちゃんの写真、行つてたのん」

幸子の上にもう一人本家の姉の鶴子がいるので、妙子は幼いころからの癖で、幸子のことを「中姉ちゃん」、雪子のことを「雪姉ちゃん」と呼びならわしたが、その「ゆきあんちゃん」が詰まって「きあんちゃん」と聞こえた。

「いつか井谷さんに預けといたのんを、勝手に先方へ持って行かはってん。何やたいそう気に入ってはるらしいねんで」

「先方の写真ないのんか」

階下のピアノがまだ聞こえているけはいなので、雪子が上がって来

そうもないと見た幸子は、

「その、一番上の右の小抽出あけてごらん、——」

と、紅棒を取つて、鏡の中の顔へ援助しそうなおちよほ口をした。

「あるやろ、そこに」

「あつた、——これ、雪あんちゃんに見せたのん」

「見せた」

「どない云うた」

「例によつてどないも云わへん、『あゝこの人』云うたよけや。こいさんどう思う」

「これやったらまあ平凡や。——いや、いくらかえり男の方かしらん。——けどどう見てもサラリーマンタイプやなあ」

「そうかて、それに違いないねんもん」

「一つ雪あんちゃんにえゝことがあるで。——佛蘭西語教せてもら

顔があらかた出来上がったところで、幸子は「小槌屋呉服店」と記してある畳紙の紐を解きかけていたが、ふと思いついて、

「そやった、あたし『B足らん』やねん。こいさん下へ行つて、注射器消毒するように云うといてんか」

脚気は阪神地方の風土病であるともいうから、そんなせいかも知れないけれども、こゝの家では主人夫婦を始め、ことし小学校の一年生である悦子までが、毎年夏から秋へかけて脚気に罹り／＼するので、ウィタミンBの注射をするのが癖になつてしまつて、近頃では医者へ行くまでもなく、強力ベタキシンの注射薬を備えておいて、家族が互いに、何でもないようなことにもすぐ注射し合つた。そして、少し体の調子が悪いと、ウィタミンB缺乏のせいにしたが、誰が云い出したのかそのことを『B足らん』と名づけていた。

ピアノの音が止んだと見て、妙子は写真を抽出に戻して、階段の降り口まで出て行つたが、降りずにそこから階下を覗いて、

「ちよつと、誰か」

と、声高に呼んだ。

「——御寮人さん注射しやはるで。——注射器消毒しといてや」

二

井谷というのは、神戸のオリエンタルホテルの近くの、幸子たちが行きつけの美容院の女主人なのであるが、縁談の世話をするのが好きと聞いていたので、幸子はおかねてから雪子のことを頼み込んで、写真を渡しておいたところ、先日セリットに行った時に、「ちよつと奥さん、お茶に付き合つて下さいませんか」と手の空いた隙に幸子を誘い出して、ホテルのロビーで始めてこの話をしたのである。実はこちらへ御相談をしないで悪かつたけれども、ぐず／＼して良い縁を逃がしてはと思つたので、お預かりしてあつたお嬢様のお写真を何ともつかず先方へ見せたのが、一箇月半ほど前になる。それきり暫く音沙汰がなかったで、自分は忘れかけていたのであつたが、先方で

はその間にお宅さんのことを調べた模様で、大阪の御本家のこと、御分家のお宅さんのこと、それから御本人のことについては、女学校へも、習字やお茶の先生の所へも、行って尋ねたらしい。それで御家庭の事情は何もかも知っていて、いつかの新聞の事件なども、あの記事が誤りだということはおわざ／＼新聞社まで行って調べて来ているくらいなので、よく諳解していただけれども、なお自分からも、そんなことがあるようなお嬢様かどうかまあお会いになってごらんなさいと云って、納得が行くように説明はしておいた。先方は謙遜して、蒔岡さんと私とは身分違いでもあり、薄給の身の上で、そういう結構なお嬢様に來ていたゞけるものとも思えないし、來ていたゞいても貧乏所帯で苦勞をさせるのがお気の毒のようだけれども、万一縁があつて結婚できるならこんな有難いことはないから、話すだけは話してみたいと云っている。自分の見たところでは、先方も祖父の代までは或る北陸の小藩の家老職をしていたとかで、現に家屋敷の一部が郷里に残っているというのであるから、家柄の点ではそう不釣合でもないのではあるまいか。お宅さんは舊家でありになるし、大阪で「蒔岡」といえば一時は聞こえていらしたに違いないけれども、——こう申しては失礼であるが、いつまでもそういう昔のことを考えておいでになつては、結局お嬢様が縁遠くおなりになるばかりだから、大概なところで御辛抱なすつたらいかがであらうか。現在では月給も少ないけれども、まだ四十一だから昇給の望みもないことはないし、それに日本の会社と違つてわりに時間の餘裕があるので、夜学の受持時間の方をもつと殖やして四百圓以上の月収にすることは容易だと云っているから、新婚の所帯を持つて女中を置いて暮らして行くにはまず差支えあるまい。人物については、自分の二番目の弟が中学時代の同窓で、若い時からよく知っているの、太鼓判を捺すといっている。そう云つてもお宅さんの手で一往お調べになるに越したことはないけれども、結婚がおくれた原因は全く器量好みのためで、ほかに理由はないというの、やはりほんとうらしく思える。それは巴里にも行つていたので

し、四十を越してもいることだから、まるきり女を知らないはずはないだらうけれども、自分がこの間會つてみた感じでは、それこそ生真面目なサラリーマンで、遊びの味などを知つていそうな様子は微塵もなかった。器量好みなどということは、得てそういう堅人によくなるのだが、その人も巴里を見て來た反動でか、奥さんは純日本式の美人に限る、洋服なんか似合わなくてもよい、しとやかで、おとなしくて、姿がよくて、和服の着こなしが上手で、顔立ちももちろんだけれども、第一に手足のきれいな人がほしいという注文なので、お宅のお嬢様なら打つてつけたと思うのであるが、——というような話なのであった。

長らく中風症で臥たきりの夫を扶養しつゝ美容院を経営して、かわら一人の弟を医学博士にまでさせ、今年の春には娘を目白に入學させたというだけあつて、井谷は普通の婦人よりは何層倍か頭腦の廻転が速く、万事に要領がよい代りに、商売柄どうかと思われるくらい女らしさに缺けていて、言葉を飾るような廻りくどいことをせず、何でも心にあることを剥き出しに云つてのけるのであるが、その云い方がアクドクなく、必要に迫られて真実を語るに過ぎないので、わりに相手に悪感を与えることがないのであつた。幸子も最初、井谷がいつもの急ぎ込むやうな早口でしゃべるのを聞いてみると、随分この人はと思ふところもあつたけれども、だんだん聞いて行くうちに、男勝りの親分肌な氣象から好意で云つてくれていることがよく分かるし、それに何よりも、理路整然と、打ち込む隙もなく話しかけて來られるので、ぐつと俯伏せに取つて抑えられてしまった感じがした。そして、では早速本家の方とも相談をし、またこちらでもその人の身元を調べるだけは調べさせていたゞいと、その時はそう云つて別れたのであつた。幸子のすぐ下の妹の雪子が、いつの間にか婚期を逸してもう三十歳にもなっていることについては、深い諷刺がありそうに疑う人もあるのだけれども、實際はこれというほどの理由はない。たゞ一番大きな原因を云えば、本家の姉の鶴子にしても、幸子にしても、また本人の雪

子にしても、晩年の父の豪奢な生活、蒔岡という舊い家名、——要するに御大家であった昔の格式に囚われていて、その家名にふさわしい婚家先を望む結果、初めのうちは降るほどあった縁談を、どれも物足りないような気がして断り／＼したものだから、次第に世間が愛憎をつかして話を持って行く者もなくなり、その間に家運が一層衰えて行くという状態になった。だから「昔のことを考えるな」という井谷の言葉は、ほんとうに為めを思った親切な忠告なので、蒔岡の家が全盛であったのはせいぜい大正の末期までのことで、今ではその頃のことを知っている一部の大阪人の記憶に残っているに過ぎない。いや、もっと正直のことを云えば、全盛と見えた大正の末ごろには、生活の上にも営業の上にも放縦であった父の遣り方が漸く祟って来て、すでに破綻が続出していたのであった。それから間もなく父が死に、営業の整理縮小が行なわれ、次いで舊幕時代からの由緒を誇る船場の店舗が他人の手に渡るようになったが、幸子や雪子はその後長く父の存生中のことを忘れかねて、今のビルディングに改築される前までは大体昔の倅をとどめていた土蔵造りのその店の前を通り過ぎ、薄暗い暖簾の奥を懐しげに覗いてみたりしたものであった。

女の子ばかりで男の子を持たなかった父は、晩年に隠居して家督を養子辰雄に譲り、次女幸子にも婿を迎えて分家させたが、三女雪子の不仕合せは、もうその時分そろ／＼結婚期になりかけていたのに、とう／＼父の手で良縁を捜してもらえなかったこと、義兄辰雄との間に感情の行き違いが生じたこと、などにもあった。いったい辰雄は銀行家の倅で、自分も養子に来るまでは大阪の或る銀行に勤めていたのであり、養父の家業を受け継いでからも実際の仕事は養父や番頭がしていたようなものであった。そして養父の死後、義妹たちや親戚などの反対を押し切って、まだ何とか蹈ん張れば維持できたかも知れなかった店の暖簾を、蒔岡家からは家来筋に当たる同業の男に譲り、自分はまたもとの銀行員になった。それというのは、派手好きな養父と違い、堅実一方で臆病でさえある自分の性質が、経営難と闘いつつ不馴れな

家業を再興するのに向きなきことを考え、より安全な道を選んだ結果で、当人にすれば養子たる身の責任を重んじたからこそその処置なのであるが、雪子は昔を恋うるあまり、そういう義兄の行動を心の中で物足りなく思い、亡くなった父もきつと自分と同様に感じて、草葉の蔭から義兄を批難しているであらうと思っていた。と、ちょうどその時分、——父が死んで間もないころ、義兄がたいそう熱心に彼女に結婚をすゝめた口があった。それは豊橋市の素封家の嗣子で、その地方の銀行の重役をしている男で、義兄の勤める銀行がその銀行の親銀行になっている関係から、義兄はその男の人物や資産状態などをよく知っているというわけであった。そして豊橋の三枝家ならば格式から云っても申し分はないし、現在の蒔岡家に取っては分に過ぎた相手であるし、本人もいたって好人物であるからと、見合いをするまでに話を進行させたのであったが、雪子はその人に出会ってみて、どうにも行く気になれなかったのであった。というのは、別に男ぶりがどうこうというのではないが、いかにも田舎紳士という感じで、なるほど好人物らしくはあるけれども、知的なところが全くない顔つきをしていた。聞けば中学を出た時に病気をしたとかで上の学校へはいらなかったというのであるが、おそらく学問の方の頭は良くないのであらうと思うと、女学校から英文専修科までを優秀な成績で卒業した雪子としては、さき／＼その人を尊敬することができそうもない懸念があった。それに、いくら資産家の跡取りで生活の保証はあるにしても、豊橋というような地方の小都會で暮らすことは淋しさに堪えられない気がしたが、それには誰よりも幸子が同情して、そんな可哀そうなことがさせられるものかと云ったりした。義兄にしてみれば、義妹は学問はよくできたかも知れないけれども、少し因循過ぎるくらい引込み思案の、日本趣味の勝った女であるから、刺戟の少ない田舎の町で安穩に暮らして行くのには適しているし、さだめし本人にも異存はあるまいと極めてかゝったのが、案に相違したのであったが、内気で、含羞屋で、人前では満足に口が利けない雪子にも、見かけによらない所があ

って、必ずしも忍従一方の婦人ではないことを、義兄が知ったのはその時が最初であった。

が、雪子にしても、お腹なはらの中ではっきり「否いな」にきまっていることなら、早くそう云えばよいものを、どうとも取れるような生返事はかりして、いよ／＼となつてから、それも義兄や上の姉には云わないうで、幸子に打ち明けたのは、一つにはあまりにも熱心な義兄の手前、云い出しにくかつたせいもあるが、そういう風に言葉数の足りないのが、彼女の悪い癖なのであった。そのために義兄は内心否でないのでと感違あやまひをし、先方も見合あひいをしてからは、急に乗り気になつてぜひに懇望して来るといふわけで、話は退ひきならぬ所まで進んだのであったが、いったん「否」の意志表示をしてからの雪子は、そうなるを義兄や上の姉が代る／＼口を酸くして頼むようにして勧めても、最後まで「うん」といふことを云わないうでしまった。今度は泉下の義父にも喜んで貰もらえると思つてかゝつた縁談であるだけに、義兄の失望は大きかつたが、それより困つたのは、先方に對し、仲に立つて斡旋かんせんしてくれた銀行の上役の人に対し、いまだ挨拶のしようがなくて冷汗の出る思おもひをしたこと、——それも、もつとも聞える理由があるならばだけでも、顔が知的でないなどと下らぬ難癖をつつけて、こんな、二度とありそうにもないもつたない縁を嫌うといふのは、たゞ雪子の我が儘で、邪推をすれば、故意に兄を苦しめ立ち場に陥れてやろうという底意があるのではないかとさえ、取れないでもなかつた。

それからこつち、義兄は雪子の縁談には懲り／＼した形で、他人が持つて来てくれる話には喜んで耳を傾けるけれども、自分が積極的に取り持つこと、先に立つて良い悪いの意見を述べることは、できれば避けたいという風に見えた。

三

雪子を縁遠くしたもう一つの原因に、井谷の話の中に出た「新聞の

事件」というものがあつた。

それは今から五六年前、當時廿歳はたちであつた末の妹の妙子が、同じ船場の舊家である貴金屬商の奥畑家の倅こと恋に落ちて、家出をした事件があつた。雪子をさしおいて妙子が先に結婚することは、尋常の方法ではむづかしいと見て、若い二人がしめし合あひして非常手段に出たもので、動機は眞面目であるらしかつたが、どちらの家でもそんなことは許すべくもなかつたので、じきに見つけ出して双方に連れ戻して、そのことはたわいもなく解消したかのごとくであつたが、運悪くそれが大阪の或る小新聞に出てしまつた。しかも妙子を間違えて、雪子と出、年齢も雪子の年になつてゐた。當時時岡家では、雪子のために取消しを申し込んだものか、たゞしそうすれば半面において妙子がしたことを裏書きするのと同じ結果を招く恐れがあり、それも知慧のない話であるからいつそ黙殺してしまつたものかと、当主辰雄がさん／＼考へたのであつたが、過ちを犯した者はどうあらうとも、罪のない者にとばかりを受けさせておくわけには行かぬと思つたので、取消しを申し込んだところ、新聞に載つたのはその取消しではなく、正誤の記事で、予想した通り改めて妙子の名が出た。辰雄はその前に雪子の意見も聞いてみるべきであるとは心付いていただけけれども、聞いたところ取り分け自分に対して口の重い雪子が、どうせ明瞭な答をしてくれそうもないことは分かつてゐたし、義妹たちに相談すれば利害の相反する雪子と妙子との間が紛糾こんきうするところであらうしと考へ、妻の鶴子に話しただけで、自分一人の責任でそういう手段に出たのであつたが、正直のところを云えば、妙子を犠牲にしても雪子の冤を雪ぐことによつて雪子によく思われないという底意が、いくらか働いてゐたかも知れない。それといふのが、養子の辰雄には、おとなしいようでもその実いづくでも打ち解けてくれない雪子というものが一番氣心の分らない扱いにくい小姑ここなので、こんな機会に彼女の機嫌を取りたかつたこともある。しかしその時も当てが外れて、雪子も妙子も彼に悪い感じを持つた。雪子に云わせれば、新聞に間違つた記事が出たの

は私の不運としてあきらめるより仕方がない、取消しなどというものはいつも人目に付かない隅の方に小さく載るだけで、何の効果もありはしない、私たちとしては、取消しにせよ何にせよ一回でも多く新聞に出ることが不愉快なのだから、そつと黙殺してしまうのが賢かったのだ、兄さんが私の名譽回復をしてくれるのは有難いけれども、そうしたらこいさんはどうなるであらう、こいさんのしたことは悪いには違いないが、年齒も行かない同士の無分別から起ったこととすれば、責められてよいのは監督不行届きな両方の家庭で、少くともこいさんについては、兄さんはもちろん私にだって一部の責任がないとは云えない、そう云っては何だけれども、私は自分の潔白は、知る人は知っていてくれると信じているので、あのくらしい記事でそんなにひどく傷つけられる自分であるとは思っていない、それより今度のことが原因で、こいさんが僻み出して不良にでもなったらどうするか、兄さんのすることは万事理窟詰め、情味がない、第一これほどのことを、最も利害関係の深い私に一言の相談もせずに実行するとは専横過ぎる、———というのであったが、妙子は妙子で、兄さんが雪姉ちゃんのために証を立てゝ上げるのは当り前だけれども、私の名を出さないでも済ませる方法もあったらうではないか、相手は小新聞なのだから、何とか手を廻せば伏せてしまふことができたろうものを、兄さんはそういう場合にお金を吝しむからいけない、———と、これはその時分から云うことがまてていた。

辰雄はこの新聞の事件の時、世間に合はず顔がないと云つて辭職願を出したほどであった。もつともその方は「それには及ばぬ」ということで無事に済んだが、雪子が受けた災難の方は何としても償いようがなかった。たま／＼幾人かの人は、正誤の記事に気が付いて彼女の冤罪を知ったでもあらうが、彼女は潔白であつたにしても、そういう妹娘のある事実が知れ渡つたことは、姉娘を、その自尊心にもかゝわらず、いよ／＼縁遠くする原因になつた。たゞ、雪子自身は内心はとにかく、表面は「それくらいなことでは傷つきはしない」という建前

でいたので、そんな事件のために妙子と感情が齟齬する結果にはならず、かえつて義兄に対して妙子を庇うという風であつた。そして、この二人は、上本町九丁目の本家から、阪急蘆屋川の分家、———幸の家の方へ、前から始終、二人が帰れば一人が来るという風にして、代る／＼泊りに来ていたのが、この事件をきっかけにしてだん／＼頻繁になり、二人が一緒にやつて来て半月も泊まり続けることがあるようになった。それというのが、幸子の夫の貞之助は、計理士をしていて毎日大阪の事務所へ通ひ、ほかに養父から分けてもらつた多少の資産で補いをつけつゝ暮らしてゐるのであつたが、嚴格一方の本家の兄と違つて、商大出に似合わず文学趣味があり、和歌などを作るという風であつたし、本家の兄のような圖書權を持たなかつたし、いろ／＼の点で雪子たちには、そう恐くない人であつた。たゞあまり雪子たちの滞在が長くなると、本家へ気がねして「一遍帰つてもろたら」と幸子に注意することはあつたが、幸子は毎度、そのことなら姉ちゃんに諒解してしてくれるから、心配しやはらんでもよい、今では本家も子供が殖えて家が手狭になつたことだし、時々妹たちが留守にした方が姉ちゃんも息抜きができるであらう、まあ当分は当人たちの好きになうにさせておいても別条はないと云い／＼して、いつかそういう状態が普通になつていたのであつた。

そんな工合にして数年たつうちに、雪子の身の上には格別の変化も起らなかつたが、妙子の境遇に思いがけない発展があつたので、結局においてそれは妙子の運命にも或る関わりを持つに至つた。———というのは、妙子は女学校時代から人形を作るのが上手で、暇があるとよく小裂を切り刻んでいたずらしていたものであつたが、だん／＼技術が進歩して、百貨店の陳列棚へ作品が出るようになった。彼女の作るのは佛蘭西人形風のもの、純日本式の歌舞伎趣味のもの、その他さまざま／＼で、これにも他人の追隨を許さない独創の才が閃めいて、それは一面、映画、演劇、美術、文学等に互る彼女の日頃の嗜好を語るものでもあつた。とにかく彼女の手から生まれる可憐な小藝術品は

次第に愛好者呼び集め、去年は幸子の肝煎で心斎橋筋の或る画廊を借りて個展を開いたほどであった。彼女は最初、本家は子供が大勢で騒々しいので、幸子の家へ来て作っていたが、そうなるともって完全な仕事部屋はほしくなって、幸子の所から三十分もかゝらずに行ける、同じ電車の沿線の夙川の松濤アパートの一室を借りた。本家の兄は妙子が職業婦人めいて来ることには不賛成であつたし、ことに部屋借りをするのはどうかと思つただけれども、この時も幸子が口をきいてやって、――過去にちよつとした汚点を持つ妙子は、雪子以上に縁遠いわけであるから、何か一つ仕事を当てがっておく方がよいかも知れない、部屋借りといつても仕事をしに行くだけで寝泊りをするのではない、幸い友達の未亡人が経営しているアパートがあるから、よく頼み込んでそこを借りることにしたらどうであろう、そこなら近い所だから自分も時々様子を見に行くことができる、というようなことを云つて、やゝ事後承諾的に運んでしまつたのであつた。

元来が陽気な性質の妙子は、雪子とは反対に警句や冗談などを飛ばすといつた風でも、たのが、事件を引き起した当座は陰鬱になつてしまひ、変に考えこんでばかりいたが、そういう新しい世界の開けたのが救いになつて、近頃は以前の朗らかさを取り返しつゝあつたので、その点では幸子の見通しが中つたわけであつた。が、本家からは月々の小遣いを貰つて、そのほかにもまた作品が相当な値で売れるところから、自然金廻りがよくなつて、時々びっくりするようなハンドバッグを提げていたり、舶来品らしい素敵な靴を穿いていたりした、これには上の姉や幸子が心配して貯金をすゝめたことがあつたが、云われするまでもなく蓄める方も如才なく蓄めて、ちゃんと郵便貯金の通帳を、上の姉には内証だと云つて幸子にだけ出して見せ、「中姉ちゃんお小遣いなら貸したげるわ」と云つたのは、さすがの幸子も開いた口が塞がらなかつた。と、或る時幸子は、「お宅のこいさんが奥畑の啓坊と夙川の土手を歩いてはつたのを見た」と云つて、注意してくれた人があつたのではつとした。実はこの間、妙子のポケット

からハンカチと一緒にライターが転がし出したのを見て、妙子が隠れて煙草を吸うことには心づいていたが、二十五六にもなつてそのくらいなことは仕方がなからうかと思つて矢先だつたので、当人を呼んで聞いてみると、本当だといふ答であつた。そして、だん／＼質して行くと、あれきり啓ちゃんとは音信不通になつていたのだが、先日人形の個展を開いた時に見に来て、一番の大作を買つてくれたりしたことから、また付き合うようになった、でももちろん清い交際をしてゐるのだし、それもほんのたまにしか会わない、自分も昔と違つて大人になつてゐるから、その点は信用して貰いたいと云うのであつた。しかし幸子は、そうなつて来ると、アパートに部屋を持たせておくことはちよつと不安で、本家に対しても責任があるように感じた。いったい妙子の仕事というものが、気分本位のものであり、そこへ持つて来ていづばし当人は藝術家気取りでゐるので、製作といつても毎日詰めて規則的にするのではなく、幾日も続けて休むこともあり、気が向くと徹夜で仕事して翌朝腹れぼつた顔をして帰つて来ることもあり、寝泊りはさせないはずだつたのが、だん／＼そうも行かなくなつてゐた。それに、上本町の本家と、蘆屋の分家と、夙川のアパートとで、そう一々、妙子が何時にあらうか出たから何時にはこちらへ着くはずだといふ風に連絡を取つていなかつたことなどを考えると、幸子は少し自分がぼんやり過ぎたかしらんとする気がして、或る日妙子の留守を窺つてアパートへ行き、友達の女主人に会つてゐるそれとなく聞いてみたが、女主人の云うのには、こいさんも近頃は偉くなくて、製作法を習いに来る弟子が二三人も出来たけれども、それは奥様やお嬢様たちで、男の人といつては、箱の職人が時々注文を取りに来たり品物を納めに来たりするくらいに過ぎない、仕事は、やり始めたら癡る方で、午前三時四時になることも珍しくないが、そんな時には、泊る設備もないことだから一服しながら夜の明けるのを待つて、一番電車で蘆屋へ帰つて行くといふ話で、時間の点なども辻褄が合つてゐた。部屋はこの間まで六畳の日本間だつたのが、最近廣い方へ変

ったというので、行ってみると、洋間に一段高くなった四疊半の日本間の附いた部屋で、参考書、雑誌、ミシン台、裂地^{れち}その他の諸材料、未完成の作品等々で一杯になっていた、壁に数々の写真がピンで留めてあるなど、藝術家の工房らしく雑然としてはいけるけれども、さすがに若い女の仕事場らしい色彩の花やかさも感じられ、掃除もよく行き届いていて、きちんと整理してあり、灰皿の底にも吸殻一つ溜^{ため}っていないという風で、その辺の抽出、状挿^{じょうさく}などを調べてみても、何ら訝^{あや}しく思われる節もなかった。

幸子は実は、何か証拠のようなものを発見するのではあるまいかと思つて、それが恐さに出かけて来る時は気が進まなかったのが、これなら来てみてよかったと心からほつとして、反動的に前よりもなお妙子を信じてしまったが、そのまゝ一二箇月過ぎて、もうそのことが忘れられた時分、或る日妙子が夙川へ行っている留守に、奥畑がひょこり訪ねて来て、「奥畑にお目にかゝりたい」と云い入れた。船場時代にはお互いの家が近い所にあつた関係から、幸子もまんざら知らない顔ではなかったので、とにかく面会してみると、突然で失礼だとは思つたけれども折り入つて御諒解を願ひたいことがありましてという前置きの後で、先年自分たちの取つた手段は過激であつたとは思ふが、決して一時の浮気心から出た行為ではなかつたこと、あの時自分たちは引き離されてしまったが、自分はいいさん（「いいさん」とは「小娘さん」の義で、大阪の家庭で末の娘を呼ぶのに用いる普通名詞であるが、その時奥畑は妙子のことを「いいさん」と云うばかりか、幸子のことを「姉さん」と呼んだ）との間に、父兄の諒解を得られるまで何年でも待とうという固い約束をしたのであること、自分の父兄は、最初はいいさんを不良か何かのように誤解していたが、藝術的才能のある真面目なお嬢さんであることを知り、また自分たちの恋愛が健全なものであることも知つて来たので、今日では結婚に反対ではないらしいこと、などを語り、それで、いいさんから伺つたところでは、こちらはまだ雪子姉さんの御縁がきまらないそふである

が、それがおきまりになってからなら、私たちの結婚も許していただけると思うことなので、いいさんと相談の上で僕がお願いに出たのである、自分たちは決して急ぎはしない、適当な時期が来るまで待つが、ただ自分たちがそういう約束をした間柄であることを、こちらの姉さんだけは分つていたと云いたい、そして自分たちを信用していただきたたい、なおまた、いつの日にか本家の兄さんや姉さんたちの方をしかるべく執り成して、自分たちの希望を遂げさせて下さるならさらに有難い、こちらの姉さんは一番理解がおりになり、いいさんの同情者であられると伺つていたので、こんな勝手なお願いをするのだけれども、——と云うのであつた。幸子は一向伺つてだけおきますという風な挨拶をして、承知したともしないとも云わずに帰したが、奥畑が話した程度のことなら、まるきり想像していないでもなかつたので、そんなに意外には感じなかつた。正直のところ、一度新聞にまで謳^{うた}われてしまった間柄である以上、二人を一緒にさせるのが最良の道であることは分つていたし、本家の兄や姉たちも結局は同じ考えに落ち着くことと思つていたのであるが、たゞ雪子の心理に及ぼす影響を慮^{おぼ}つて、できればその問題は先へ延ばしておきたかつたのであつた。で、その日、奥畑を送り出したあとで、しよざいない時にはそうするのが癖の、ひとり応接間のピアノに向かつてあれかこれかと譜本を引っぱり出しながら弾いてるところへ、頃合^{ときあひ}を測つて夙川から戻つたのであらう、妙子が何気ない顔をしてはいつて来たのを見ると、幸子はちよつと手を休めて、

「いいさん」

と云つた。

「——今奥畑の啓ぼんが帰つて行かはつた」

「そうか」

「あんたたちのこと、あたしには分つて居るけれど、——今のところ何

も云わんと、任しといてえな」